

1 9 9 6 5 1 2

ほほえみ

第 9 号

昔、田舎から江戸に出た若者が町中で水を売っているのを見て「江戸というところは水さえも買わないといけないのか」と驚き、こんな所ではとても生活できないとすぐに田舎に引き返したといひます。しかし同じ風景を見た別な若者は「江戸というところは水を売っても金になるのか」と逆に意欲を燃やしたといひます。あなたはどちらのタイプですか。同じものを見たとき、同じ境遇になったとき、それをどう見るか、またどう対処するかによって全く違う結果になることがあります。常に前向きに自分に都合のいいように勝手に解釈して明るく生きましよう。

< 第 1 1 回 ほほえみの会 >

最近入院された方 2 人を含め 2 0 人が集まりました。最近病気を知りショックのまただただ中にいる方の悩み、そして骨髄移植後の不安などについて話が出ました。

骨髄移植

最近移植をされた 2 人の方は何れも、事前に話には聞いていたが大変な状況が続いているという話がありました。何も食べられないでいる内に腸にばい菌が入ってしまった。また白血球が 0 の期間が長かったためか、高熱が続いている。など共に次々と不安な状況が出ているとのことでした。

移植をされた方は皆さんそういう経験をお持ちのようです。

そうした中、移植前に親が心配で子供のいる前で先生に不安な質問をしたら、子供が下痢嘔吐が激しくなってしまった。という体験談も出ました。あとで看護婦さんに聞くとその 4 歳の子が、「もう一つお兄さんになれるかな」と話していたそうです。子供は親の態度に敏感です。せめて子供の前では明るくしていた

いですね。

また、移植後退院して家にいるが、外で遊ばせるのにどこまで面倒を見ればいいのかわからない。という声もありました。

奥さんはもう自由に遊ばせてやりたい。ご主人は何かあると困るからつききりで面倒みよという。その意見の違いによるストレスと4歳児の有り余る遊びのエネルギーとの間で日々苦労しているという。

体験者からもまた先生からも「子供は気をつけていてもけがをするときにはする。感染するときにはする。自由にさせたらいいのではないか」との意見が出ました。

病気のショック

4月に病気がわかり入院したばかりの方が2人見えましたがショックが大きい様子でした。

ご主人は出張が多い仕事で4歳の姉の面倒もどうしていいか。会員の中には子供の病気がわかって父親が仕事を変えたという方もおられました。当面ご両親や近所の方に助けて頂くしかないかもしれません。

子供との面会

下田に住んでおり母親も仕事を持っているので面会にこれない。

毎日電話をしているが、こどもは痛みを訴え不安だという。

父親と母親と休みをずらして日曜日だけでなくウィークデーにも来るようにはしているのだが。

婦長さんからは「親は私がいなくこの子は生きていけないと思いがちだが、子供はたくましい。時間の問題ではなく、一緒にいるときに精一杯の愛情を込めてお互いを認めて生きてほしい」というお話がありました。

今回は総会です。講演はアメリカでも有名な病院でソーシャルワーカーをされていた方が帰国されましたのでその方にお願いしました。テーマは「患者と家族のケアについて」特に～患者の兄弟に対するメンタルケアの必要性について～お話ししていただきます。アメリカの小児ガン医療最先端の貴重なお話で、私たちにとっては直接役立つお話だと思います。是非ご出席ください。

ほほえみの会 代表 池田 恵一